

「約束の地」

樋口明雄 著、光文社、2008年

516頁、2,300円

ISBN 978-4-334-92642-7

「森が変わった。山が狂ってきた」

「それは全て人間が作り、もたらしてきた。人間が山を殺している」「三本足」と言われ、巨大化・凶暴化したイノシシは、人間のエゴによって破壊された環境の中で、寄生虫に体を蝕まれながらも、執拗に生きようとする姿は、なんとも痛ましい。

山梨県は八ヶ岳の豊かな自然を軸に、現代社会がかかえる問題を巧みに交差させて訴えるストーリーは、大変興味深い。自然保護のあり方・地域とのかかわり方、父と娘との関係、大人の利害を反映したいじめ問題、古いしきたりに囚われた特殊な狩猟団体、そして、特権階級と公害問題などきりがな程の話題を含んでいる。エリート官僚が、過酷な自然環境と、個性豊かな人間関係の中で、たくましく変化し、娘と共に地域に根ざしていく様は、大きな感動を受け、示唆に富んだ著作である。

著者 樋口明雄は、南アルプスの麓に住み、野生鳥獣安全管理活動にも参加、有害鳥獣対策犬のハンドラー（犬の担当）としての資格を持ち、愛犬と共に地域活動にも従事しているという。「狼は瞑らない」、「男たちの十字架」などの冒険小説の他に、「武装酒場」など阿佐ヶ谷ガート下で繰り広げられる人間社会の暗い部分も描き上げた作も注目したい。野生鳥獣安全管理官とベアドック（クマ対策犬）の活躍を描いた本書で、第27回日本冒

険小説協会大賞および第12回大藪春彦賞をダブル受賞した。

自宅のペンション近くでは、狩猟シーズンには、いつもハンターの無謀な行為があり、家族同様にかわいがっていた飼猫が、猟犬にかみ殺されるといふ事件が発生。その後も何度も抗議した父親だったが、ある年に娘の前でハンターに射殺されてしまう。後にこの娘は獣医師として、主人公の管理官業務に大きく係わってくる。序章はこの後のストーリー展開を暗示しており、第5章まで野生鳥獣安全管理官の現場での葛藤、娘のいじめ問題を軸とした展開は、現代社会がかかえるひずみを巧みに描いている。

急進的な動物愛護団体によるヒステリックな要求、地元猟師による自由狩猟という既得権を奪われたとする執拗な動きもまた、自然を保全するという立場と相容れにくい難しさを示している。当協会の活動に共通する悩みの一つでもあると感じた。また、焼却処分した焼却灰の放置が原因と思われる環境汚染問題も、我々の日常生活に密着している事柄に思う。

最終の第6章では、地元狩猟会会長の息子による殺人事件が、明るみに出るといふめまぐるしい展開で終焉を迎える。自然に係わる人間の傲慢さと脆弱さが見事に浮き彫りになった著作である。

(落合克尚)